

関係の中で立ち上がる性

—— トランスジェンダー者の性別違和についての関係論的検討 ——

町 田 奈緒士

京都大学大学院 共生人間学専攻

〒 606-8501 京都市左京区吉田二本松町

要旨 トランスジェンダーとは、自らが有する性別に属しているという自己イメージを意味するジェンダー・アイデンティティが、出生時の性別に一致しない状態として定義されている。従来のトランスジェンダーに関わる研究では、性ないし性別違和は、個人の内部にあるものとして語られてきた。しかしながら、性とは、他者との関係のうちに立ち上げられてしまうような側面があるのではないだろうか。本論文は、性ないし性別違和を関係論的な視座から捉え直すことを目的とし、対話的自己エスノグラフィと語り合い法というアプローチを用いて調査を実施した。その結果をもとに、〈器〉という記述概念を導入し、それと類似概念との整理を行い、他者とのあいだでどのように性別違和が体験されるのかについて論じた。

1. 問題と目的

1.1. 問題の所在

トランスジェンダー (TG) とは、自らが有する性別に属しているという自己イメージを意味するジェンダー・アイデンティティが、出生時の性別に一致しない状態を指す (APA, 2015; Stoller, 1964)。出生時の性別が男性である場合は Male-to-Female (MTF)、女性である場合には Female-to-Male (FTM)¹⁾ と呼ばれる。

従来の TG に関わる研究は、性を個人の内部にあるものとして想定してきた。しかしながら、こうした枠組みは、自身も TG 者であり、また、他の TG 者との「語り合い法」(大倉, 2002) を実施してきた筆者にとって、違和感があった。というのも、協力者と筆者双方にとって、性ないし性別違和は個人の内部に閉じた固定的な側面しか持たないわけではなく、他者とのあいだに立ち上がるような側面をも有するを感じてきたためである。すなわち、恒常的に同じ強度で性別違和を感じているというよりも、「今の振る舞いは『女

性』的に過ぎたのではなかろうか」と自問自答してしまう場合や、そうした問いが意識に上らず自然と振る舞える場合があった。こうした場面で起こっている現象は、性を個人内部にあるものとして捉えるような従来の枠組みからは捉えることができない。それを把握するためには、自己のあり方が他者との関係の中で形成されるという関係論的な視座の導入が必要となってくる。関係(発達)論とは、発達心理学者の鯨岡峻が考案した理論である。本理論は、他者がどう感じ、どう思っているかという人々の気持ちや思いは、知的な推測や推論を経ずに伝わり合うという「間主観性」を議論の出発点としている(鯨岡, 2006)。それと同時に、自分にも他者にもそれぞれ固有の気持ちがあり、互いに相手の思いを分かりたいという「相互主体性」を有しているという前提に立つ。鯨岡は、他者と繋がり合える存在である一方で、個としての自らの思いも大切にしたいという、根源的な両義性に貫かれた存在として人間の主体のあり方を捉えるのである。こうした関係論的な観点に立脚することによって、TG 者とその周囲の人々が、どのように分かり合い、時に繋がり得な

いと感じるのか、またそうした関係性と本人の性別違和の感覚はどのように絡んでいるのかということがより鮮明になり、彼らの体験の内実により迫ることができるのではないだろうか。このような問題意識を念頭に、本論文では、従来個人の内部に閉じた属性として捉えられてきた性および性別違和を、関係論的に捉え直すことで、新たな性理論の模索を試みることを目的とする。

1.2. TG についての医療・社会的な動向

TG をめぐる動向を辿るためには、同性愛や、医学的文脈における呼称である「性別違和」（旧称：性同一性障害）の概念の変遷を概観する必要がある。TG は、1950 年代まで、同性愛とともに性倒錯と呼ばれ、生物学的性と同じ性自認を有した異性愛者となるように治療すべき状態としてみなされてきた。TG と同性愛との峻別は、米内分泌科医ハリー・ベンジャミンの登場を待たねばならない。ハリー・ベンジャミンは、1954 年に、自身の性を身体的性とは反対の性であると確信している者に、「性転換症」という新たな呼称を与えた。その後、同性愛の項目は、精神障害の診断と統計マニュアル（Diagnostic and Statistical Manual of Mental Disorders: DSM）の第 2 版から削除された。一方、ジェンダー・アイデンティティと生物学的性が一致しない状態については、性転換症に代わって、性同一性障害（Gender Identity Disorder: GID）という新しい疾患名になって 1980 年発行の DSM-III に掲載され、精神疾患のリスト内に留まることとなった。

しかしながら、近年になり、そうした医療的潮流に変化の兆しがみられる。2013 年に発行された DSM-5 において、性同一性障害は、「障害」という色合いを薄めた「性別違和」（gender dysphoria）という名称へ変更された。また、2018 年 6 月には世界保健機関が精神疾患リストから除外されるべきであるという見解を示した。かつて精神疾患としてみなされていた TG は、現在は精神疾患リストからの削除（脱病理化）の道へと進みつつあると言える。

日本国内に目を向けると、性別を「転換」しようとする者の存在を世に知らしめたのは、1964

年のブルーボーイ事件である。これは、男娼（ブルーボーイ）3 名の要望に応じて、産婦人科医が睾丸全摘出手術などの一連の「性転換手術」を行い、東京地裁にて有罪判決を下された事件である。この判決は、医師らに手術を躊躇させる結果を招いた。その後、日本において「性転換手術」が公的に行われたのは、1998 年のことである。この手術は、女性から男性への「性転換」を望む者の請願を聞き入れた医師が、埼玉医科大学倫理委員会の許可を受けて実施したものであり、治療を望む者にとっての 30 年間の「暗黒の時代」（日本精神神経学会、2012）の終止符を打つものとして衆目を集めた。

そして、近年になり、メディアにおける性的マイノリティの露出が増えたことで、TG に加えて、同性・両性愛者を含めた「LGBT (Lesbian, Gay, Bisexual, and Transgender)」という言葉が広く知られるようになった。また、2014 年には文部科学省が、初の公的な全国調査を行い、606 件の性別に違和感を開示している児童生徒がいるという報告を受けた（文部科学省、2014）。また、こうした機運の高まりと並行して、性的マイノリティに関する講演会も各地で開かれるようになり、社会的関心が急速に高まりを見せている。

1.3. 学術的研究では TG はどのように議論されてきたか

従来の TG に関する研究は、医学や社会学、心理学的な視点に立脚して行われてきた。医学研究には、その成因の調査や、適切な診断、治療方法の提供を目的としたものが多い。成因については、数多くの調査が実施されてはいるものの、脳の部位にその原因を求めたり、遺伝子にその原因を帰属させたりするなど諸説が入り乱れており、未だ見解の一致を見ていない（e. g., Bentz et al., 2008; Henningsson et al., 2005; Swaab, Gooren, & Hofman, 1992）。また、こうした原因の究明や適切な診断をもくろむ観点に立った議論からは、一人ひとりの TG の体験のアクチュアルな側面は、捨象され、零れ落ちてしまっているように思われる。

社会学もまた、1990 年代から、フーコー、バトラーの潮流を汲みながら、クィア研究の文脈で

TG について論じている。特に、パトラー (1990/1999) が、我々が絶対的な差異であるとしてきた生物学的性もまた、社会的・文化的な構築物であるとしたことは、その後の研究に多大な影響を及ぼした。こうした社会学的視座に立脚した研究は、性が多元的であり、行為によって生み出されるようなものであることを主張した点において、非常に示唆に富むものである。しかしながら、その考察の際に参照されるのは、クィア理論の枠組みの域を出ないものが多い。クィア (queer) とは、「変態」を原義とする語である。元々は性的マイノリティに対する蔑称であったが、1990年代から同性愛者らが、そうした侮蔑語をあえて自分たちを称する言葉とすることで、原義に含まれる否定的な意味合いを肯定的なものに転換し、権利を主張するという政治的意図をもって使うようになった。そのため、クィア理論を考察の参照枠とした場合、社会的な状況に屈せず、自らの性を唯一無二のものとして誇りに思っている性的マイノリティの姿が描かれることが多い。しかしながら、実際問題としては、自らの内的な資質と、社会の中で期待される役割との間に大きく隔たりのある TG 者が生きていく過程には、さまざまな葛藤が生じる。私見では、クィア理論においては、そうした内面的ないし体験的な側面が看過されてしまっており、TG 者の葛藤を描出することが、充分になされてはいないように思われる。

また、心理学の領野に目を向けると、統計的手法を用いながら、TG 者の発達上の困難や、心理的特性、精神疾患ないし障害との関連、成因を調査したものが多くみられる (Cohen-Kettenis & Arrindell, 1990; Meyer-Bahlburg, 1985; 中塚・江見, 2004; Tsoi, 1990)。そのような統計的実証研究に対し、個人の固有性・特殊性に着目した研究がみられるようになったのは、近年になってのことである。社会学の研究も含めながら、こうした質的研究を概観すると、たとえば、自身も TG 者であると著書に記した中村 (2005) は、15名の TG 者に対してインタビューを行い、各人が既成のジェンダー観にとらわれずに生きていくことを、「ジェンダー・クリエイティヴ」と表現した。また、有蘭 (2004) は、3年にわたる MTF

の協力者へのインタビューを、ナラティブ・セラピーの枠組みを用いながら分析している。そして、「女性」らしい振る舞いをとっていたことを「病氣」として語るという、医療の現場において一般的・支配的な物語 (ドミナント・ストーリー) から、身体が男性であることを受け止めた上で、「女」として「生をデザインする」という、当人が自身で新たに構成する物語 (オルタナティブ・ストーリー) を編み出すまでを描いている。また、有蘭と同様に、ナラティブ・アプローチを採用しながら、荘島は FTM の協力者 1 名との縦断的インタビューの分析を通じて、協力者のハルがいかにして「悪魔物語」を解体し、「私物語」へと再組織化させたのかということ (荘島, 2008a) や、医療人類学者のクラインマンの概念を枠組みとして援用しながら、ハルの家族は「性同一性障害」という「疾患 (disease)」ではなく、どのようにそれを心理・社会的に体験したのかという「病 (illness)」の側面 (荘島, 2008b) について、非常に厚みのある記述をしている。

しかしながら、こうした研究もまた、研究者がどこか超越的・第三者的な視点に立って、協力者の語りを眺めているような印象が拭いきれない。たとえば、中村 (2005) の研究では、調査者である中村自身が TG であることは、協力者の語りの理解に関わっているにもかかわらず、それがどのように協力者の語りの理解に資したのかについては僅か数行の記述に留まり、協力者とのあいだにみられたであろう関係の力動感が、今ひとつ伝わってこない。しかし、インタビューとは、調査者と協力者の相互行為の産物であり (Holstein & Gubrium, 1995/2004)、その組み合わせが異なれば、そこで生み出されるものも異なる (岡本, 2014)。これを踏まえると、調査者自身の「性」に関する体験は、語りという「化学反応」を生み出すための言わば「触媒」となっており、そうした「触媒」もまた、記述される必要があると考える。

また、上記の諸研究はそれぞれにジェンダー・アイデンティティ・ディスオーダー (性同一性障害) からジェンダー・クリエイティヴへ、ドミナント・ストーリーからオルタナティブ・ストー

リーへ、disease から illness へとといった従来の枠組みを乗り越えて論を展開しつつも、性別違和を個人の内部にあるものとして捉える従来のパラダイムに留まりながら、論を展開しているように思われる。先行研究が暗黙の前提とするこうした枠組みを塗り替えるものとして、本論文を位置付けたい。すなわち、従来個人の内部に閉じた属性として捉えられてきた性および性別違和を、関係論的に捉え直すことで、新たな性理論を模索することを目的とする。

2. 方 法

本論文では、対話的自己エスノグラフィと語り合い法という二つのアプローチを採用した。この二つのアプローチを使用して得られた語りを本論文でともに記載する理由について、ここで述べる。

これまで、筆者は、「語り合い法」(大倉, 2002)と呼ばれるアプローチを用い、本論文で呈示するツバサ(仮名)を含む6名の協力者へのインタビューを実施してきた。語り合い法とは、協力者の「その人らしさ」を捉えていくにあたり、逐語録的な分析にとどまらず、インタビューの場において、間身体的・間主観的に調査者に感受されたことを積極的に呈示しながら分析することにより、協力者の体験世界に迫ろうとする方法である(大倉, 2011)。本手法を用いながら協力者の語りを分析する中で、その体験世界にさらに肉迫していくためには、まず、先述した「触媒」としての筆者自身の体験の深部の構造を掘り下げる必要性を感じるようになった。そうした作業を行った上で、協力者の語りに立ち返ることによって、これまでに描出しきれなかった新たな側面がより克明に浮かび上がるように思われたためである。そして、そのためには、数ある質的研究法の中でも、自己エスノグラフィが適していると思われた。

自己エスノグラフィとは、調査者自身の経験を記述することを通し、重層的な意識のありようを明らかにしていく手法である(Chang, 2008; Ellis, 2004)。より具体的には、研究者自身の「個人的な生」を重視し、自分の身体感覚などに問い合わ

せながら、その経験を記述していく手法である(Ellis & Bochner, 2000/2006)。こうした自らの生をその内側から描き出す点において、自己エスノグラフィは、他者からの聞き取りや観察から得られたデータとは異なる強みを持っており(森岡, 2007)、「研究者である自分」と、「協力者としての自分」を繋ぐ手段を与えるとされる(Neville-Jan, 2005)。

このような利点がある一方で、自己エスノグラフィには、調査者が研究者と協力者という二重の役割を担うことによって、自らの体験を記述・分析していくことに難しさが伴われる(Murphy, 1987/2006; 沖潮(原田), 2013)。また、自らを曝け出すことによる傷つきなどの精神的苦痛が伴われるおそれも指摘されている(Ellis & Bochner, 2000/2006)。そうした困難に対応するため、本論文では、自己エスノグラフィを対話的に行うアプローチ(対話的な自己エスノグラフィ; 沖潮(原田), 2013)に着目した。具体的には、インタビュー形式の対話セッションを通じて、対話者に私自身の体験を聞き出してもらい、その逐語録を作成した。そして、この語りを見直しながら考察を進めていく際に、喚起されたエピソードもまたデータとして扱った。すなわち、対話的な自己エスノグラフィにおいては、対話における語りと、その考察をもとに喚起されたエピソードを分析対象とした。

自己エスノグラフィでなく、対話的な自己エスノグラフィを選択したのは、次のような理由による。語りの場における他者の存在は、語りの生成を促し、語り手が自身を相対化する契機となり、分析を深化・拡張させるという(浜田, 2009; 沖潮(原田), 2016; 莊島, 2010)。また、自己探究を続けるときに生じる苦痛も、探究の同伴者の存在により、和らげられると考えられた。そこで、本論文は、従来の自己エスノグラフィに対話者が加わった形態である、対話的な自己エスノグラフィを採用することによって、自己エスノグラフィ実施において孕まれる危険性を減じるとともに、語り合い法で得られた協力者の語りに対する理解を深めていくための糸口として、採用することとした。

また、本論文では、調査者である筆者自身の体験を聞き出してもらうにあたり、対話者を指導教員に依頼した。その理由としては、指導教員が、語り合い法をインタビューの基礎としていることで、筆者の前言語的な身体感覚にまで踏み込み、これまで意識に上っていなかった感覚を言語化していけるような直感があったためである。また、筆者自身の体験について知ってもらえている点からも、安心感をもって自らについて語ることが可能になるように思われた。一方、対話者を指導教員にすることの危険性として、指導教員と学生という間柄であるために、筆者が自身を社会的に望ましくみせるような受け答えをしてしまったり、指導教員の持つ枠組みに筆者が合わせ過ぎてしまったりする可能性が考えられる。この点については、分析に際して筆者自身の身体感覚に改めて向き合い、語りがそれに忠実なものとなっていたかどうかを確認していくという作業を行った。

以上をまとめると、本論文では、筆者が協力者にインタビューをする形式をとる語り合い法と、対話者にインタビュー形式の対話を実施してもらうことにより、筆者が自らの経験を語り、そこから喚起された体験を綴ったエピソードの分析を含んだ対話的な自己エスノグラフィという、二つの手法を併用した調査結果を提示する。これにより、語り合い法によって得られた協力者の語りをより豊かに考察することをねらいとした。

次章においては、3.1の「私の場合」で、対話的な自己エスノグラフィによって得られた語りの結果と考察を、3.2の「ツバサの場合」で、語り合い法を採用して得られた語りの結果と考察を記す。すなわち、考察の主たる対象（TG者）は3.1では筆者自身、3.2ではツバサ（および彼女の語りに耳を傾ける筆者）ということになる。

対話的な自己エスノグラフィについては、2016年12月～2017年1月にかけて、各々1時間半程度の対話セッションを2回実施した。語り合い法に関しては、2015年11月～2016年1月にかけて、各々1時間半～2時間程度をかけ3回実施した。

なお、次章では、筆者自身もTG者であることに鑑み、「私」という一人称を用いて記述していくことにする。また、総合考察とインタビュー分

析との間の橋渡しをするため、個々のインタビュー場面の分析の後に、「*」を適宜挿入してより理論的な議論を行うこととする。

3. 結果と考察

3.1. 私の場合

1) 私について

幼少期、私は自らを男子だと思っていた。よく近所の人々から男子だと思われ、当時毎日のように遊んでいた友達からも、「お前、女みたいな名前だなあ」と言われていた。しかしながら、次第に、体育の着替えの部屋、水着などの様々な社会的文脈が、私に「女子」であることを突きつけるようになった。私は、徐々に、自分は「女子」として名指される存在であることを自覚した。そろそろ「女子」として適応せねばと思った私は、引っ越しとともに、中学校から、必死に「女性」として振る舞おうとした。その一方、声も低くなり、体格も一回り大きい男性へと変貌をとげていく男子生徒に、気も狂いそうな羨望と嫉妬を覚えるようになっていった。高校時代に入り、中学時代の「女性的」な自分に嫌気が差した私は、髪を短くし、所謂「ボーイッシュ」な見た目へと変化させていった。しかしながら、子ども時代のように、もはや「男子」のように扱ってもらえるということは叶わなくなった。代わりに、どこか本来の自分は押し隠し、「女性」になりすまして生活をしているという感覚に付きまとわれた。こうした中学・高校時代にも、自身の身体が今日も女性であることや、女性の友人に恋愛感情を抱いてしまうことに絶望感を覚え、自分は本来は男性ではないかという思いが溢れるようなことがあった。しかし、そうしたことについて考えると、世界が崩壊してしまうような感覚を覚え、これは自分が死ぬまで一人で隠し通さねばならない恥部なのだと言ひ聞かせた。

高校生活も終わりを迎え、激しい嫉妬の対象であった男性のいない空間に逃げたかったという気持ちもあり、女子大学に入学した。そこで、クラスメイトから好意を寄せられた出来事などをきっかけに、自らの性についての問いが再び湧き上

がった。そんなある日のこと、たまたま読んでいた漫画の広告ページに、「私は男なのに、肉体(いれもの)が裏切った」という言葉が書かれていた。私は、心臓が飛び出すような思いでそれを見た。これが、「性同一性障害 (GID)」という概念との出会いであった。その後、「GID」という言葉を手掛かりに情報収集を行うようになり、専門外来を訪ねた。2年ほど通院した後、医師からホルモン治療を実施する許可が下りた。湧き上がる喜びの一方で、私は強い不安を感じた。身体を男性化したい願いはたしかにあるが、社会的に本当に男性として生活していけるのか、確信が持てなかった。そして、自身がどちらの性として今後の人生を送りたいのかを考えたいと思い、現所属大学に編入学をし、TGの研究を始めた。身体は未治療の状態である。

2) 「性同一性障害」という言葉との出会い

上述の通り、私は、大学入学後に「性同一性障害 (GID)」という概念に出会った。この概念に出会うまで、自らを男性のように思って女性に対して好意を抱くことに対して、私は「罪の意識」を抱いていた。誰かにそれが知られてしまったら、それまで自分の内側の世界と外側の世界²⁾を領かつものとしてあった堤防が決壊する。そして、内側に溜まっていた、自分でも手に負えないようなドロドロしたものが、堰き止められずに外側の世界へ流出してしまうような気がしていた。インタビュー外でもこの「罪の意識」についての話をした際に、友人から「それって誰に対する罪なの?」と、尋ねられたことがある。強いて言うなら、これまで育ててくれた両親に対する申し訳なさが浮かんだが、感覚としては、むしろ、自分自身の内にある「道徳律」に反していると思った。内にある道徳律、すなわち男性が女性の心をしているなんてあってはならないし、女性が男性の心をしているなんてあってはならないということ。男性であれば女性を好きになることが当たり前で、女性であれば男性を好きになることが当然だということ。たしかに社会の中には「オカマ」や「オナベ」、「ホモ」や「レズ」という人々もいるが、そうした人々は、あくまでブラウン管や夜の世界に生きる人々で、自分とは異質の「普通」ではな

い「異常な」人々であると感じていた。

そうした規範意識を持ちつつも、自分自身を男性として感じていて、好きになる対象が女性であることは、変えられなかった。ただ、その性に関する点を除くと、勉強であったり習い事であったりといった場面で、当時は「模範的」であるとされることが多かった。そして、世間の言う「普通」や「望ましいこと」を自分にとってのそれとして無批判に内在化していた。そうした「普通」の規範を生きていた自分にとって、こと性に関するそうした心的現実、自分のこれまで築いてきた「普通」で「正しい」世界を崩すような破壊性を有していた。それは、他者に絶対に知られてはならないことであったのである。

*

当事者特有の感じ方かもしれないが、そうした私にとって、「GID」という概念は、それまでのグチャツとしていたものを掬い取ってくれる受け皿のように感じられた。どうしてそのように感じられたのだろうか。自分の内的感覚に根差した言葉がない状態は、社会の中に、その感覚の居場所がない感じ、そんな感覚を持っていることは、「普通」で「正しい」世界で生きる上では「罪」である、という気持ちを私に抱かせていた。「GID」という言葉の存在は、社会の中には、自分以外にも、このような感覚を持つ人々が存在するのだということを教えるとともに、こんな「罪」深い考えを抱くのは自分だけであるという観念から解き放ってくれた。それまで他者から、自分が男だと思っていること、女性を好きになることについては、決して受け止められないと感じていた私には、ひとまず、この言語的な受け皿が手に入ったというだけでも、受け止められた感覚をもたらすに充分であったのである。

また、「GID」という言葉と出会ったことによって初めて、自分が何者かを説明する際に、他者に「自分とはこのような者です」と差し出すための〈器〉——これまでの言語化できない自己の身体感覚を掬い取ってくれるような器、ある意味グロテスクな「なまもの」もそこに盛り付けられていれば一応それなりの料理だとみなされるような器、つまりはグチャツとした醜い部分も含め

て、自分の全体をそこに盛りつけて他者の前に差し出すことができるような器——を手に入れたように思われた。それは、18歳まで隠し通してきた自分の「恥部」を、他者に開いていく可能性をもたらしてくれたように思われたのだった。

ただし、このような言語的な概念を手にしたことによって、実際の他者との関わりにおいて、他者に自らの性のあり方を伝えることが本当に可能になったのかと言えば、事はそう単純ではなかった。以下の語りでは相槌として挟まれた相手の発言を丸括弧付きで示している。また、声のトーンや沈黙などの非言語的な情報、およびその他の補足情報は、[] で記している。

3) 他者との関わりにおいて立ち上がる性

語り 1. 原田さん（仮名）の前ではちょっと「女子」っぽくなる

指導教員（以下、O）：普通の、例えばこういう研究室とかの場では〔修士課程の時〕³⁾ 言っていないよね？

私：言わなかったですね。

O：〔そうする〕と、「女性」に擬態⁴⁾みたいな感じになるわけ？

私：そうですね、めっちゃ頑張って、見た目の擬態みたいのは、高校とか中学のときみたいにもうやってはなかったですけど、振る舞いの擬態っていうか、なんかよく分からないですけど、「女子」っぽい振る舞いを頑張って心掛けていたというか、〔中略〕「彼氏いたことあるん？」って言われてたら、「や、彼氏じゃなくて彼女がいた」とかは言わずに「彼氏とか恋愛とか興味なくて、いたことないねん」みたいな感じで、恋愛に興味ない「女子」に擬態してた感じですね。

O：今はその擬態してる感ってないの？

私：そんなにないですかね。

O：何がおっきいの、それは言うたってこと？

私：言って、ちゃんと分かってずっとし続けてくれるという感じかな。今も多分、100パーセント理解できてるわけじゃないと思うんですけど、100パーセント理解するって、

やっぱり無理ですけど…少なくとも、「気持ち悪いとかみんな思わないだろう」って勝手に思っちゃってる。なんでやろ、なんでですかね…自分自身もなんかこう、修士との違いは何なんだろう…なんで女子として擬態してて、今はしてないだろう。なんかやっぱり、自分の経験とかもゼミとかで話したり日常で話したりしてるから、変に偽る必要がないっていうか、偽ったらそれはそれで擬態で。多分、みんな見抜ける感じが、なんか違くないみたいな。原田さんとか、男性性が強いなって思うんで、原田さんの前ではちょっと女子っぽくなる感じの感覚は自分の中であるんですけど、でもそれは、しゃあないというか…それは擬態しようと思ってしてるんじゃないくて、無意識になる行動…何やろ、修士のときみたいに、無理してずっと女子として振る舞ってる感覚っていうのはもうないです。

この対話（2回目のセッション）の中では、指導教員の前ということもあってか、「無理してずっと女子として振る舞ってる感覚っていうのはもうない」と現在の状態をやや理想的なものとして語ってしまった。しかし、もう少し自身の感覚を丁寧に追ってみると、私は、やはり未だに特定の場や関係性の中では、気付くと「女子」として「擬態」して（「女性っぽく」振る舞って）しまっているような感覚を覚える。

そうした関係性の例として引き合いに出している原田さんは、180cmを超える長身の持ち主であり、9等身とも思えるような体躯から、すらりと長く筋肉質な腕が伸びており、何かスポーツを現役でしていることが一見で分かるような人物である。そうした原田さんから、私は強い「男性性」をたしかに感じ、彼と関わるときの自分は、「女子っぽくなる」感覚を覚える。だが、「男性性」や「女子っぽさ」という言葉で、私は具体的にどんなことを意味しようとしていたのだろうか。

原田さんは、チームのエースの役割をずっと務めていたこともあってか、いつでもどんな状況でも、「強い」自分であることを、自分にも他人にも求めているようなところがある。また、競争心

を隠さずに人に接していく彼の姿が、相手と競うことよりも、多少自分の思いを犠牲にしても、相手と協調してやっていくことをいつも優先してしまう私には、とても羨ましくもあった。そうした、競争心を相手に向けていく好戦的な姿勢、相手と喧嘩調になっても引かずに攻めていくところなどをまとめて、私は「男性性」と呼んでいたのだと思う。そんな原田さんの前では、決して争えない感じや、そもそも自分が争いたいと思って、同じ「土俵」に乗っているとも思ってもらえないという、独特な感じを覚えていた。ここで言う「土俵」とは、男しか上がれない場という意味で用いている。特に相撲に憧れがあったわけではないが、私にとって、「土俵」は女人禁制のイメージを強く喚起させる。少年サッカー団や葵祭の祭礼など、生物学的にも男性として生まれていたのであれば、入りたかった場の総体的な表象として、「土俵」は私の前に立ち現れることがある。原田さんとの関わりにおいては、仮に、自分では「土俵」に上がったと思っても、原田さんからは上がっているとは見られないだろうという感触があった。言い換えれば、「土俵」の外の人間として、すなわち、文字通り同じ土俵で取り組みをするのではなく、ただ「凄いなあ」と思いながら、取り組みを眺めている土俵に立てない身分の人間——女性——として、目の前の原田さんを仰ぎ見ながら、そこに存在することしか許されない感じがした。

最もその「土俵」外の感覚を感じた体験として思い出されるのは、私が銭湯に入りたくないという話を、原田さんにしたときのことである。

語り 1 から喚起されたエピソード.⁵⁾ 銭湯には入れない

合宿の場所の相談を持ちかけたときに、銭湯や温泉がある場所が良いと言った原田さんに、私は、ポロッと「自分は銭湯には入れないので、あんまりその点を推している旅館には惹かれないんですね～」と返してしまった。すると、すかさず、原田さんは、「なんで女風呂嫌なの!？」と私に尋ねた。私は、「自

分の身体を見られるのも嫌だし、周りの身体を見るのにも罪悪感があるし…」と、原田さんから矢継ぎ早に飛んでくる質問に答えていった。しかしながら、途中から、私のことを知ろうとしてくれているというよりも、からかいも入り混じった調子で訊かれているように感じられてきてしまった。結局私は、その空間に耐えかね、「まあ、そんな感じで、自分は銭湯に入れんです～! [笑] ではでは!」とざっくりと締め括り、みすばらしいような、みじめな気持ちになり、その場を後にした。

この場面で、私は「何でお前は女子なのに、女子風呂を嫌がるのか」と詰問されているように感じられてしまった。原田さんには一定程度 TG のことを話していたから、原田さんはひょっとすると、「心が男性ならば、なぜ女子風呂を嫌がるのか」という意味で聞いたのかもしれない。だが、原田さんから、女性二人と合わせて「女子三人組」と言われるなど、普段から「土俵」外の人間としてまなざされていると感じてしまっていたこともあり、「女なのに」と問い詰められているように思ってしまったのだと思う。

＊

私にとって、この出来事は、他者に自分という存在をなかなか受け止めてもらえない哀しさと、一種の諦めを覚えた体験であった。研究や日常の会話を通して、自分が「女子」ではないということ、私は、「TG」という概念（「GID」と同様、〈器〉となりうるような概念）を呈示しながら伝えていたつもりでいた。しかし、そうした〈器〉を出された側が、それを見たこともない——すなわち、人間の性は男性・女性のどちらか二つに区分されるという男女二元論的な考え方しかしたことがない——のだとしたら、いきなりそれを目の前に置かれても、どのようにそれを扱えば良いのか分からないわけで、戸惑うのは無理もない。

ここでのエピソードからは、単に「GID」や「TG」といった自己呈示をするための概念を手に入れるだけでは、他者との関係において、私自身の性のあり方が受け止められるということにはな

らない（〈器〉がそれとして機能しない）ことが窺われるだろう。では、そのためには何が必要なのだろうか。

語り 2. 口にせずとも伝わるものとしての性

（セクシュアル・マイノリティ同士で、カミングアウトの前に何となく感じ取れるという話の後に）

私：そう、とか言うのもなんですけど、なんか分かるのは分かるんですよね、そう。プラス、当事者同士にそれは閉じてるわけじゃないなって思うんですけど、中高同じだった友達がいて私と、その子、中高一緒に仲良かったのはその子 1 人なんですけど、その人に、大学に入ってから、大学は別の大学に行ったんですけど、大学入学後も定期的に会っていて、1 年に 1 回以上は会ってて、そのときに、実は自分、性同一性障害でみたいな話をしたときに、その子が、「中高でなんか謎やったことっていうか、なんかすっきりしなかったことが、今の説明で分かったわ」みたいな感じで言ってくれたことがあって、なんか、自分としては感慨深かったんですよね、それが、自分では全然言っていなかったけど、何か自分の隠れたものを見ようとしてくれた。見ようとしたか見えたか分からないんですけど、人っていたんやなあと思って、それはすごいうれしかったんですよね。

O：聞かなかったの？ 何もやもやしてたことってって、

私：聞いたかな、その子曰く、一緒にいてドキドキすることがあったみたいな感じで言ってくれたんで、そういうものがまず一つなのかなって、

O：ドキドキするっちゃうのは、恋愛のなっちゃうか、

私：多分、恋愛の意味で、

同じ中学・高校に通った友人（仮名：ナナコ）に対して、私は、「罪」（すなわち、自らのことを男性と感じていること、女性を好きになること）

の「告白」を行っていなかった。それにもかかわらず、私から雰囲気のように滲み出るものを（彼女にとっても「謎」で「すっきりしない」ことではあったのかもしれないが）、察知してくれていた。彼女は、私自身も言語化できなかった未分化な「なまもの」をそのまま受け止めてくれていたように思う。ナナコは、中学・高校とも同じ部活に属していた友達であり、久しぶりに再会しても、すぐに当時の掛け合いのテンポに戻れるような竹馬の友である。彼女には、弱冠 12 歳にして、皆から「お母さん」と呼ばれるような天性の安定感と温かさが備わっていた。そんな彼女に対しては、平生は人と深く付き合わないように一線を引いた関わりをしてしまいやすい私も、気を許して関わるのができた。皆を包みこむような態度で接する彼女の前では、先述のような「女性」として自らを偽っているような感覚が薄く、気付くとありのままの自分が出てしまっている感じがしたのである。

*

自らを「男性」だと思っていることや、女性を好きになってしまうことを、当時「罪」だと思っていた私は、そのことをナナコにも言えなかった。それにもかかわらず、ナナコは、私自身言語化できずに未分化であったものを、しかしながら、気配のように滲み出るものを察知してくれていたのではないだろうか。ここでは、原田さんの前で「女子っぽくなる」感じを覚えていた状態とは対照的に、ナナコという一人の他者が、原初的・身体的な次元で、私の「謎」を受け止めてくれるような〈器〉になってくれているように思われる。

3.2. ツバサの場合

前項では、対話的自己エスノグラフィの手法を用いて、未分化な身体感覚を GID という〈器〉に収められたときの体験や、他者に受け止められる感覚、受け止められない感覚を描いてきた。しかし、語り 2 におけるナナコのように、単に自分を受け止めてくれる他者が重要であるというだけでは、TG 者の複雑な体験の様相を理解したことにはならない。TG 者が受け止めてもらえるように感じられる時とは、一体どのような時なのであ

ろうか。そうした問題意識をもとに、協力者であるツバサとの語り合い法によって得られた語りを改めて読み返した際に、浮かび上がってきたことがあった。それは、対話的自己エスノグラフィによって調査者自身の体験の深部を照らしていく中で初めて見えてきたものだと言えるだろう。以下では、ツバサの人物像を描いた上で、その点について検討していく。

1) ツバサについて

ツバサは、調査時 23 歳の MTF の大学生である。彼女には、共通の知人を介してインタビューを依頼した。彼女は、すらしとしたスタイルに、綺麗に手入れされた髪、そしてキリッとした目鼻立ちに恵まれており、街中を歩いていたら思わず目が行くような美しさを放つ。調査時、彼女は大学院への進学を目指す学部生であった。ツバサもまた、TG について研究していることもあり、専門的な知識を覗かせる局面もみられた。

ツバサは、幼少期には、「ジェンダー的に男の子」であったことを語った。ロボットアニメやゲーム、プラモデル作りなどに興味があったという。その後、中学・高校一貫の男子校に通学していた。その頃は、「TG 的な文脈」は、「言葉にならないから、顕れなかった」という。しかし、中学校の演劇で「女装」をしたことをきっかけに、自分で女性用の服を買って、自宅でもたまに「女装」をするようになった。彼女は大学入学後に TG という言葉に出会い、ホルモン治療を開始した。

2) 他者との関わりにおいて立ち上がる性

ツバサは、どのような相手と話す際に、自らを偽ったりせずに振る舞えるのだろうか。そうした問いを念頭に彼女の語りを見返したときに、ふと目が引き寄せられたのは、3 回目の語り合いにおける次の語りであった。

語り 3. 二元論以外の前提がほしい

[シスジェンダー⁶⁾ 女性よりも、シスジェンダー男性や MTF 者の方が話しやすいというツバサの話に続いて]

ツバサ (以下、T) : 結構、難しいですね。

多分、私の中でも同性同士のコミュニケーションっていうのが女の人とはやったことがないからだと思う。逆に、私を MTF だと知ってる人だったら結構仲良く喋れる。けど、知らない人だったら絶対無理だから。

私：知らない人だと、それは MTF、女性、男性、全部に共通して言えること？ (うん) そっか。じゃあ軸としては性別っていうのもあるかもしれないけど、まずツバサさんを MTF って知ってるかどうかで、まず、接しやすさが分かれる感じ。

T : そうですね。わがままな話なんですけどね。

私：やっぱ人との関係でそういうのってある気がするな。

T : 安心できないっていうか、知っといってもらわないと。

私：安心できない。さっきのとも絡んできますね。MTF を知ってるかどうかでまず分かれて、その後も多分、これはやっぱりあるというか、初対面か [どうかで接しやすさが分かれる]。

T : 初対面で、でも向こうが知っといってくれるなら割と誰でもいける気はしますね。

私：そっか。そういえば、私の場合ツバサさんのことを知ってるっていうか、だから、まだ全く知らない人よりかは喋りやすい感じみたいなの…？

T : 全然喋りやすいです。あと、やっぱり喋りやすいっていうか私のコミュニケーションがしやすい状況っていうのは、二元論の世界っていうのを、完全に性別が二つしかないよって思ってる人じゃないっていうことをこっちが知ってないと喋りにくいっていうのかもしれないですね。

私：なるほど。MTF を知っているかどうかっていうのとセットなのか分かんないけど、

T : 考えてみたら、女性とは喋りにくいって言ったけど、レズビアンの子とは結構バリバリ喋れるんですよ。バイセクシャルの子とか。私：ピアンとかパイの子。それって何っていうか、彼らが二元論の世界で生きてるか生きて

ないかっていうより、二元論以外の人もいるってことを知ってるってこと？

T: そうです。一番喋りやすいの、ゲイの人かもしれへんな。

私: 男でも。かつ、ゲイか。

T: そうか。性別という概念だけじゃなくて、そういう哲学が似てそうな人っていうか、性に関する。

私: 性に対する哲学？

T: それがあがる程度オーラという空気感で分かる人がいるじゃないですか。

私: なるほど…空気感で分かる人か…

[中略]

私: レズビアン⁷⁾の友達とゲイの友達で接しやすさの違いは出てくるかな？

T: あんまりないかもしれないです。

私: そこはあんまりない。セクマイ⁷⁾の場合は分かった上で普通に接してくれたら接しやすいと感じて、特にセクマイじゃない人の場合、「普通」⁸⁾のというか、男か女かになって、その場合は、

T: そうか。この分け方自体がしんどいのかもしれない、私にとっては、

私: 分け方自体？

T: つまり、男女で分けられるコミュニケーションの方法っていうことが存在することが私にとってしんどい。

私: そうなんか…なるほど。自分の勝手な想定的に X ジェンダー⁸⁾の場合は男女で分けられるコミュニケーションにしんどさを感じて、FTM、MTF の場合はあまり感じないのになっていう前提を持ってたんやけど、そうじゃないってことか。

T: 私は MTF の代表でもないですけど、ただ私の場合は、ここには男と女しかいませんっていう前提が怖い。

私: 前提が怖いか。そっか。だからこそ、そういう前提を持っていない MTF とかレズビアン、バイセクシャル、ゲイ。

T: の人とかだと、とても話しやすいです。

私: 前提を共有してるからか…男女二元論以外の前提というか…

T: そうですね。二元論以外の前提で。

「(自分のことを MTF であると) 知らない人だったら絶対無理だから」というツバサの言葉は、私には、ズシッと重い意味を持ったものとして響いた。「絶対無理」と強い語調で言わざるを得ないぐらい、彼女にとっては、相手が自らのことを「MTF だと知ってる」ということは、関わりの質を決定付けるようなものであるということが伝わってきたのである。彼女の語りに耳を傾けながら、たしかに、私自身もまた、私のことを FTM であることを知らない人と関わる際に、かなり気を遣うという点で分かるような感じも覚えつつ、「絶対無理」とまでは思っていなかったのも、どうしてそのようにツバサを感じるのか、そして、どうしてシスジェンダー男性や MTF 者の場合は「話しやすい」と感じるのか、突っ込んで訊いてみたくなった。

私は、ひとまず対話相手をそのセクシュアリティ⁹⁾で分けながら、尋ねていくことにした。ツバサは、そうした私の分け方に合わせながら、「絶対無理」という感覚を「安心できない」という言葉で言い換えながら、それとは逆に、「コミュニケーションがしやすい状況」は、「完全に性別が二つしかない」わけではないことを知っている人が対話相手の時であることを語った。そして、ゲイやバイセクシャル、レズビアンの場合、そうした「性に関する」「哲学」を持っていることが多いため話しやすいということが、話しながら分かっていった。

しかし、ツバサが喋りやすい場面についての理解が整理されていくこととは裏腹に、この会話が進んでいくにつれて、何か自分でもしたくないようなことをしているような、切り分けたくないものを、バサバサと仕分けてしまっているような、少し苦しいような感覚が私の中に生じた。そうした感覚が何なのか分からないままに、次へ次へと進行してしまい、徐々に重たい空気感が私たちのあいだを漂いはじめていた。そのときに、ツバサが「そうか。この分け方自体がしんどいのかも」しれない、私にとっては」とハッと閃いたように語ってくれたとき、その時の苦しいような感覚が

ずっと引いていくように感じられた。

＊

私が感じた苦しいような感覚とは、そもそも、男性と女性どちらが接しやすいのか、また、ゲイとレズビアンで接しやすさは違うのかという、ここでの問いの構造自体が、性別は二つに分かれるものであるという、男女二元論的前提に乗った質問をしていたがために生じていたのだと思われる。その構造をツバサが上手く拾って、「この分け方自体がしんどいかもしれない、私にとっては」と言ってくれていたから、私にとってもある種「しんどい」ように感じられた感覚も引いていったのかもしれない。

そして、こうしたやり取りの後にツバサの語った「二元論以外の前提で」というのは、何を意味しているのだろうか。「女性」ではなく、かといってシスジェンダー男性の持っている（と私が思うような）「空気感」や「オーラ」を、私はおそらく身に纏ってはいない。そして、おそらく、ツバサもまた、彼女自身が放つ「空気感」について、私と同じように、すなわち、「男性」でもなく、シスジェンダー女性とも異なるものとして感じているように思われる。そうした私たちが、「二元論」の前提しかない場で振る舞うことを求められた場合には、そうした「空気感」の受け皿がないため、自分を無理やりにでも、「男性」ないし「女性」のどちらかの鋳型に嵌め込まねばならない。あるいは、一切の他者関係を断つことによって、「空気感」や「オーラ」といった身体から滲み出るものという意味で身体的なものと、「二元論」の前提という言語的なものとの間の不協和になんとか折り合いを付けようとするであろう。

こうしたことから考えると、おそらく、目の前の相手の「二元論以外」の前提の有無によって接しやすさが変わってくるのは、相手がそうした「前提」を有していれば、男性でもなければ、生来の女性でもないような自分を受け止めて接してもらえる可能性があるということではないだろうか。ここからは、一足飛びに、先ほどの私の語り2で呈示したナナコのような受け止めとまではいなくとも、まずは言語的文脈として、「男性」

「女性」以外の文脈があるということの重要性が窺われる。しかも、それは、「性に関する哲学」や「前提」という言葉が使われているが、頭だけで有しているような「知識」というよりも、ツバサが語ったとおり、「オーラ」や「空気感」としか表しようのないような、より原初的・身体的な次元のものであることについても付記しておきたい。そんな「空気感」から、相手から自分を受け止めてもらえていることが伝わり、その人の前では自然に振る舞えるのであろう。

4. 総 合 考 察

本論文の目的は、従来個人の内部に閉じた属性として捉えられてきた、性ないし性別違和を、関係論的視座から捉え直すことであった。議論に移る前に、性をそうした他者との関わりから、記述および説明する概念として導入する〈器〉という語の定義付けをしておきたい。

4.1. 〈器〉とは何か ―― その理論的布置

〈器〉とは、自らの未分化な感覚をおさめるような受け皿のことである。「『性同一性障害(GID)』という言葉との出会い」で描いたように、GIDといった社会・言語的な概念もそうしたものになりうるが、前章の事例からは、それ以上に重要なものとして、言語以前の感覚や雰囲気を受感してくれる他者の存在が浮かび上がってきた。

言語と他者という、通常は別物だとみなされている二つのものを、なぜともに〈器〉という言葉で名指そうとするのか。それは、本論文が何よりも人間の体験の理解を目指し、その体験の構造に沿った知を生み出そうとしていることによる（大倉、2008）。すなわち、本稿での考察の手掛かりとなっているのは、TG者自身の主観的な身体感覚である。前章において描出してきたように、社会・言語的な概念も他者の存在も、TG者のもやもやとした未分化な感覚に収めどころを与えてくれるという点においては、共通していた。こうした身体的な感覚に収まりをつけてくれるものを、同一の概念として括って考えることで、TG者が自然体で振る舞えるような関係や場がいかなるも

のであるかについて、重要な視座がもたらされると思われる。

社会的・言語的な自己規定も、ありのままの自分を受け止めてくれる他者も〈器〉になりうる。理論的には、前者の側面を強調すれば、〈器〉概念はエリクソンのアイデンティティ概念に近づき、後者の側面を強調すれば、ビオンのコンテイナー概念に近づくとと言えるだろう。

まず、エリクソンのアイデンティティとは、自らの「斉一性」と「連続性」を直接的に知覚することと、他者によるそれらの承認を自覚することという二つの事態の噛み合いを意味する(Erikson, 1980/2011)。ただし、アイデンティティは、「斉一性」「連続性」をもった者として自らを「自覚」し、社会的に自己規定をするという、幾分意識的かつ、健康的なあり方を想定した自己概念である。また、アイデンティティは、どのような場面においても基本的に維持される社会的な自己規定として、固定的で持続的なニュアンスもある。心理学者かつ性科学者でもあるマネー(1965)は、自覚ないし振る舞いにおいて表現される性別の特性の「斉一性、一貫性、持続性」を、特にジェンダー・アイデンティティと名指したが、これによっては、他者とのあいだにおいて流動的に立ち現れるような性のあり方を捉えることはできない。

一方、ビオンは、自らの内にある耐え難い感情を患者が投げ込んでくるのに対して、治療者がそれを受け入れて自身の内部に憩わせ、その感情を再び取り入れ可能な安全なかたちで患者に返す働きに注目し、こうした機能を果たす治療者をコンテイナーと名付けた(Bion, 1967/2007)。ビオンのコンテイナー概念は、言語的・社会的な色合いの強いエリクソンのアイデンティティ概念に対して、身体的・原初的な次元で、未分化なものを受け止める他者の重要性を強調していることが特徴であるように思われる。もともと心理臨床の現場で用いられる用語ではあるが、私たちの日常的な社会生活・他者関係で起こっている現象を捉える際にも重要な示唆を与えてくれるものだと考えられる。

こうした理論と照らし合わせながら、〈器〉の

理論的位置付けを考えると、エリクソンのアイデンティティと、ビオンのコンテイナーを折衷させた概念であると言える。すなわち、〈器〉とは、GIDやTGといった、自分の感覚に社会的な承認を与えてくれるような言葉だけがそれに該当するわけではない。むしろ、そうした言葉だけでは不十分であり、TG者当人のあり方を原初的・身体的な次元で受け止めてくれる他者も〈器〉となりうることもあり、こうした受け止めこそが重要であると考えられる。

4.2. 関係性の中で起こっていること——〈器〉の関係的側面

前項で論じた〈器〉概念をもとに、他者との関係の中で、どのように性ないし性別違和が生じているのかを検討していきたい。TG者にとって、ありのままに振る舞えない感覚が強い時とは、TG者当人にとっては〈器〉として感じられていたものが、相手には単なる「言葉」として映ってしまっている場合である。具体的には、セクシュアル・マイノリティというレッテルを貼られてしまい、相手から不快感を持たれてしまう場面や、語り2やエピソードで呈示したような、男女二元論的な志向性が強い相手と関わる場面がそれに相当する。エピソードでは、原田さんから不快感は抱かれていないものの、私にとっての〈器〉は、原田さんには単なるラベルとして映っており、ありのままの私自身は上手く彼には伝わっていない。

このような場合、私が「女子っぽくなる」と表現していたように、TG者は、自分の一挙手一投足について、「自分の今の振る舞いは、あまりに男性／女性的に過ぎたのではなからうか」と、考えてしまうような状態に陥ってしまう。だが、一般的には、自らの振る舞いについて、そのように逐一考え込むことはなく、ごく自然と振る舞っているのが通例である。本来ならば考え込まなくても良いような一つひとつの事柄について、「男性的なのか、女性的なのか」峻別する篩にかけられてしまうように感じられる現象を、ここで「性化」と名指したい。男女二元論的な志向性が強い相手を前にすると、TG者にとっては、自らの振る舞いが「性化」されてしまう。すなわち、男性

か女性かのどちらかに勝手に振り分けるような篩にかけられ、そうした篩によって仕分けることができないものが相手に伝わらないことに由来した、むなしさや諦めなどの感覚を覚えるのではないかと考えられる。

一方で、そうした振る舞いが自身の中で性化されずに、ありのままに振る舞える場面というのは、私の語り2や、ツバサの語り3がそれに該当する。まず、語り2で素描されたのは、私が自分の「罪」について「告白」をしていなかったにもかかわらず、友人のナナコが、私から滲み出るものを感じてくれていた事例であった。これは、他者が、TG者の言語化できないような領域のものを受け止めるような〈器〉となってくれて、そうした未分化なものの自体を身体的次元で了解してくれていた事態として捉えることができよう。また、そこまでの状態に一足飛びにいかなくとも、ひとまずは、ツバサが「(男女)二元論以外の前提で」と語ったように、TGという言葉を手掛かりとして、その迎え入れ方をしてもらえることが期待できるような場面が、自然体で振る舞えるような場であるように思われる。

ここで、言葉を手掛かりとして、その迎え入れ方をしてもらおうと述べたが、それがどういう事態を意味するのか、もう少し踏み込んで議論したい。人は、他者と関わりを持つ際、言葉を用いながら、身体が対象を迎え入れる際の関わり方(態勢:佐藤, 2014)を調整し、関係を築いていく。たとえば、父親と母親が、子どもを授かると、自らや互いを「パパ」「ママ」と呼び合うように変化し、そうした言葉が子どもとの関係性を編み出していく側面がある。こうして、乳児を迎え入れる態勢が徐々に整えられていくといったように、自己規定概念は、人の生のあり方を調節するような働きを有すると捉えることができる。こうした言葉と態勢の不思議な関わりを念頭に置いて本事例に戻ると、TGであることを了解されることとは、まずは、「TG」という言葉でもって、迎え入れる相手の態勢を調整してもらおうことであると言える。

TGという〈器〉とともにその中身を相手が、身体に染み込んだ次元で受け止めてくれたならば、いつしかその言葉は必要でなくなるだろう。すな

わち、認知的に「TGだ」と考えるまでもなく、いつもすでに相手のありのまま(〈器〉の中身)をまなごすような状態となるのであろう。相手のそのようなあり方によって、TG者の心の裡では、振る舞いが「性化」(たとえば、ツバサの場合は「男性化」、私の場合は「女性化」)されてしまうことがない。すなわち、頭でTG者であると「理解」されるだけではなく、身体的次元でもって自然体の自分自身を「了解」してもらえているときに、安心してそこにいられると思われる。

以上をまとめると、TG者にとって何よりも重要なのは、自然体の自分自身を丸ごと(身体的次元で)受け止めてくれるような他者の存在である。TG当人の側でいくら「TG」や「GID」といった言語的な〈器〉を手に入れても、他者の側が男女二元論的な枠組みの中でしかものを考えることができず、それらを自分とは異なる人々に対する単なるレッテルとして扱うのみで、自らの態勢を調節することがないのであれば、その〈器〉は十分に機能しない。一方、他者の側が、TG者から差し出された〈器〉に応じて、二元論的枠組みを離れてそれを受け止めるような柔軟さを持つならば、それらの言語的規定は有用であらう。すなわち、TG者にとって、それらの言語的規定を提示した方が、他者から迎え入れられ方(TG者を受け入れる他者の態勢)が調節される可能性が高まるということになる。端的に言えば、言語的規定としての〈器〉によって、実際に他者が〈器〉になってくれる可能性が高まるということである。

他者が〈器〉となってくれるか否かによって、TG者の性のあり方が変化する(あるいは、少なくとも揺さぶられる)。性とは、個人の内部に完結している固定的なものではなく、他者とのあいだにその都度立ち上がるような現象でもあるのである。そして、このような性のあり方を取り押さえていくためには、従来のジェンダー・アイデンティティや、クィアといった概念のみでは不足しており、本論文が打ち出す〈器〉のような、より身体感覚に根差した概念や理論的枠組みが必要である。

4.3. 二つのアプローチの併用によってもたらされることについて

本論文においては、語り合い法と対話的自己エスノグラフィという、他者や自己の体験世界を理解していくための二つのアプローチを併用した。対話的自己エスノグラフィを通じて自分自身の体験を掘り下げること、語り合い法の分析をより深いものにすることがそのねらいであった。

例えば、本稿の語り3では、「二元論以外の前提で」というツバサの語りに、当初は重きを置いて分析をしていなかった。しかしながら、対話的自己エスノグラフィ実施後に、読み返してみると、彼女の語りは、言語による態勢の調節という、TG者が自然に振る舞えるための重要な条件を明らかに出すものであることに気付いた。それが本稿の理論的考察の重要な部分を成しているのは、上に見た通りである。こうした点において、両アプローチを併用した効果が確かにあったと言えるだろう。

ただし、本稿においては、紙幅の都合上、両アプローチから得られる認識の複雑な絡み合いや、ツバサと私の相違点などについて詳しく検討を行うことができなかった。今後このような点についても詳細に検討していき、〈器〉理論を精緻化させながら、TGを生きるという体験や、さらには、人間にとっての性そのものについて探究していくことが課題となるだろう。

謝辞

まずは、こうした一風変わった研究をやりたいと言いつつも、いつともじっくりと相談にのってくださった指導教員の大倉得史先生に、厚くお礼申し上げます。また、査読者の先生や、帝京平成大学の荘島幸子先生を始めとし、多くの方々から大変貴重なご助言を賜りました。そして、ゼミの皆さまには、いつもざっくばらんにご意見いただき、支えていただきました。最後に、ともに語り合いをしてくださった協力者のツバサさんに、心より感謝申し上げます。

注

- 1) FTM/MTFはそれぞれ、トランス男性／トランス女性という呼称に遷移しつつあるが、インタビュー内で前者の用語を多く使っていることや、当事者の間ではまだ前者の方が頻用されるため、FTM/MTFという名称を本論文においては使用する。
- 2) 「内側の世界」と「外側の世界」は、松木（1996）の言う、「内的世界」（internal world）と「外的世界」（external world）の概念に対応している。内的世界とは一人ひとりの心の中に実感される世界のことを、外的世界とは実際に住んでいる現実世界のことを意味する。私は、過去に、この概念を大学の講義で聞き、自分の生きてきた世界観と近いものとして採用するようになった。
- 3) 筆者は、修士課程では他の研究室に所属し、自分自身の性のあり方についてカミングアウトすることなく、TGとは異なるテーマの研究を行っていた。
- 4) これまでの協力者のインタビュー分析の中で、筆者が使ってきた記述概念。TG者が、社会の中に用意された男性ないしは女性という性役割に、自らをはめ込むように生活をしなければならないことを意味する。ここでは、筆者が、「女性」として自らを呈示しながら振る舞っていることを特に指している。
- 5) インタビューで得られた語りとは区別するため、インタビューによって喚起された出来事についての記述を、ここでは「エピソード」として記載している。
- 6) 生物学的性と、ジェンダー・アイデンティティが一致している者。非トランスジェンダー者のことを指す。
- 7) セクシュアル・マイノリティ（性的マイノリティ）のこと。脚注9）で詳述するセクシュアリティが、多数派とは異なる人々のことを指す。
- 8) 男性でも女性でもないジェンダー意識を持つ者を指す。日本独自の用語（Dale, 2012）。
- 9) 生物学的性や、性的指向をはじめとする、各人の性のあり方のこと。

文 献

- American Psychiatric Association (2015) Guidelines for psychological practice with transgender and gender nonconforming people. *American Psychologist*, 70 (9), 832-864.
- 有蘭真代（2004）物語を生きるということ——「性同一性障害」者の生活史から。ソシオロジ, 49 (1), 55-71.
- Bentz, E. K., Hefler, L. A., Kaufmann, U., Huber, J. C., Kolbus, A., & Tempfer, C. B. (2008) A polymorphism of the CYP17 gene related to sex steroid metabolism is associated with female-to-male but not male-to-female transsexualism. *Fertility and Sterility*, 90(1), 56-59.
- ビオン, W.R. (2007) 再考——精神病の精神分析論

- (松木邦裕・中川慎一郎, 訳). 金剛出版. (Bion (1967) *Second thoughts: Selected papers on psycho-analysis*. London: William Heinemann Medical Books.)
- パトラー, J. P. (1999) ジェンダー・トラブル——フェミニズムとアイデンティティの攪乱 (竹村和子, 訳). 青土社. (Butler, J. P. (1990) *Gender trouble: Feminism and the subversion of identity*. New York: Routledge.)
- Chang, H. (2008). *Autoethnography as method*. California: Left Coast Press.
- Cohen-Kettenis, P. T., & Arrindell, W. A. (1990) Perceived parental rearing style, parental divorce and transsexualism: A controlled study. *Psychological Medicine*, 20(3), 613.
- Dale, S. P. F. (2012) An introduction to X-Jendā: Examining a new gender identity in Japan. *Intersections: Gender and sexuality in Asia and the Pacific*, No. 31.
- エリクソン, E. H. (2011) アイデンティティとライフサイクル (西平直・中島由恵, 訳). 誠信書房. (Erikson, E. H. (1980) *Identity and the life cycle*. NY: W. W. Norton & Company.)
- Ellis, C. (2004) *The ethnographic I: A methodological novel about autoethnography*. California: Alta Mira Press.
- エリス, C.・ボクナー, A. P. (2006) 自己エスノグラフィー・個人の語り・再帰性: 研究対象としての研究者 (平山満義, 監訳). 質的研究ハンドブック 3 巻 (pp. 129-164). 北大路書房. (Ellis, C. & Bochner, A. P. (2000) Autoethnography, personal narrative, reflexivity: Research as subject. In N. K. Denzin & Y. S. Lincoln (Eds.), *Handbook of qualitative research* (2nd ed., pp. 733-768). Thousand Oaks, California: Sage.)
- 浜田寿美男 (2009) 私と他者と語りの世界——精神の生態学へ向けて. 京都: ミネルヴァ書房.
- Henningsson, S., Westberg, L., Nilsson, S., Lundström, B., Ekselius, L., Bodlund, O., Lindström, E., Hellstrand, M., Rosmond, R., Eriksson, E., Landén, M. (2005) Sex steroid-related genes and male-to-female transsexualism. *Psychoneuroendocrinology*, 30(7), 657-664.
- ホルスタイン, J. A.・グブリアム, J. F. (2004) アクティブ・インタビュー——相互行為としての社会調査 (山田富秋・兼子一・倉石一郎・矢原隆行, 訳). せりか書房. (Holstein, J. A., Gubrium, J. F. (1995) *The active interview*. California: Sage Publications.)
- 鯨岡峻 (2006) ひとがひとをわかるということ——問主観性と相互主体性. ミネルヴァ書房.
- 松木邦裕 (1996) 対象関係論を学ぶ——クライン派精神分析入門. 岩崎学術出版社.
- Meyer-Bahlburg, H. F. L. (1985) Gender Identity Disorder of Childhood Introduction. *Journal of the American Academy of Child Psychiatry*, 24(6), 681-683.
- Money, J. (1965) *Sex research: New developments*. New York: Holt, Rinehart & Winston.
- マーフィー, R. F. (2006) ボディ・サイレント (辻信一, 訳). 平凡社. (Murphy, R. F. (1987) *The body silent: The different world of the disabled*. New York: Henry Holt.)
- 森岡正芳 (2007) 当事者視点に立つということ. 宮内洋・今尾真弓 (編) あなたは当事者ではない——〈当事者〉をめぐる質的心理学研究 (pp. 185-195). 北大路書房.
- 文部科学省 (2014) 学校における性同一性障害に係る対応に関する状況調査について. http://www.mext.go.jp/component/a_menu/education/micro_detail/_icsFiles/fieldfile/2016/06/02/1322368_01.pdf (情報取得 2018/02/09)
- 中村美亜 (2005) 心に性別はあるのか? ——性同一性障害 (ジェンダー・アイデンティティ・ディスオーダー) のよりよい理解とケアのために. 医療文化社.
- 中塚幹也・江見弥生 (2004) 思春期の性同一性障害症例の社会的, 精神的, 身体的問題点と医学的介入の可能性についての検討. 母性衛生, 45(2), 278-284.
- Neville-Jan, A. (2005) The problem with prevention: The case of spina bifida. *The American Journal of Occupational Therapy*, 59, 527-539.
- 日本精神神経医学会・性同一性障害に関する委員会 (2012) 性同一性障害に関する診断と治療のガイドライン (第4版). 精神神経学雑誌, 114(11), 1250-1266.
- 岡本依子 (2014) 開かれた対話としてのインタビュー. 斎藤清二・山田富秋・本山方子 (編), 質的心理学フォーラム選書 1——インタビューという実践 (pp. 107-128). 新曜社.
- 沖潮 (原田) 満里子 (2013) 対話的な自己エスノグラフィー——語り合いを通した新たな質的研究の試み. 質的心理学研究, No. 12, 157-175.
- 沖潮 (原田) 満里子 (2016) 障害者のきょうだいが抱える揺らぎ——自己エスノグラフィにおける物語の生成とその語り直し. 発達心理学研究, 27(2), 125-136.
- 大倉得史 (2002) ある対照的な2人の青年の独特なありようについて. 質的心理学研究, No. 1, 88-106.
- 大倉得史 (2008) 語り合う質的心理学——体験に寄り添う知を求めて. ナカニシヤ出版.
- 大倉得史 (2011) 「語り合い」のアイデンティティ心理学. 京都大学学術出版会.
- 佐藤義之 (2014) 「態勢」の哲学——知覚における身体と生. 勁草書房.
- 荘島幸子 (2008a) 「私は性同一性障害者である」という自己物語の再組織化過程——自らを「性同一性障害者」と語らなくなったAの事例の質的検討 (「語り」からみるパーソナリティの発達・変容). パーソナリティ研究, 16(3), 265-278.
- 荘島幸子 (2008b) トランスジェンダーを生きる当事者と家族——人生イベントの羅生門の語り. 質

- 的心理学研究, No. 7, 204-224.
- 莊島幸子 (2010) 性別の変更を望む我が子からカミングアウトを受けた母親による経験の語り直し. 発達心理学研究, 21(1), 83-94.
- Stoller, R. J. (1964) A contribution to the study of gender identity. *The International Journal of Psycho-Analysis*, 45, 220-226.
- Swaab, D. F., Gooren, L. J., & Hofman, M. A. (1992). Gender and sexual orientation in relation to hypothalamic structures. *Hormone Research*, 38, 51-61.
- Tsoi, W. F. (1990) Parental influence in transsexualism. *Singapore Medical Journal*, 31(5), 443-446.

Sexuality Formed by the Relationship with Others —— A Relational Exploration into Gender Dysphoria of Transgender Individuals ——

Naoto MACHIDA

Graduate School of Human and Environmental Studies,
Kyoto University, Kyoto 606-8501 Japan

Summary Transgender people are those whose gender identity, a self-image of belonging to a certain sex, does not conform to their sex assigned at birth. Previous studies on transgender issues have presupposed that sexuality and gender dysphoria occur within individuals. However, sexuality may be formed by their relationship with others. The present study aims at reconsidering sexuality and gender dysphoria from a relational perspective, adopting a dialogical autoethnography and In-Depth Talking approach. Based on the results, a descriptive concept named “container” was introduced, and differentiated from other similar concepts to discuss how transgender individuals experience their gender dysphoria in relations with others.